



東北大

きょうかん

発行
東北大学教育学部
関東地区同窓会

事務局
〒187-0022
東京都小平市
上水本町 6-5-1-304
(小林 昭文方)

電話・FAX 042-325-2819
zelkoba304aki@kyf.biglobe.ne.jp

題字：江川 亮

ご挨拶
「三十周年、節目を踏まえ更なる前進を！」
「連帯強化と日常生活充実の一助に！」



星 永揚
東北大学教育学部関東地区同窓会会長
「教育社会」66年卒

平成元年七月二十一日、東京都千代田区の学士会館で産声を上げた「関東地区同窓会」、当時の記録には「恩師七名、会員百五十名の予想を上回る参加者」とありました。その後、年を重ね、今年創設三十周年の節目を迎えました。この間、陰に陽に会の発展を支えて下さった歴代会員の皆様のお力添えに心からお礼申しあげます。

現在、登録会員数は約四百名。主な活動は、毎年発行の会報「きょうかん」による情報提供、二年毎開催の総会・懇親会による連帯の醸成と安否確認、東北支部や関東萩友会(全学同窓会)との連携活動等です。着実に歩を進めている関東地区同窓会ですが、近年、会員の高齢化に伴う減少、若手会員の発掘・拡大の苦戦(学部再編で新旧専攻の繋がりが不明確な事も一因)等の課題に直面しています。これ等時代の変化に的確に対応していくため、役員の率先垂範での努力は勿論ですが、今一度、会員の皆様の更なるお力添えをお願いいたします。また、同窓会本部(学部)との連携を一層強化してまいります。ご理解とご協力を切にお願いいたします。

さて、節目の三十周年にあたる今年度の総会・懇親会は、来る十月二十八日(日)午後一時から前回



「川内キャンパスの教育学部棟」



「川内キャンパスの三太郎の小徑」
阿部次郎の代表作「三太郎の日記」から命名

※「ドローンで母校の各キャンパスを巡ってみましょう！」下記URLからお入りください。
<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/2017/02/news20170214-01.html>

と同じ新宿駅近くの「麗澤大学東京研究センター」を会場に開催いたします。仙台からは工藤与志文同窓会長(学部長)をお招きし、教育学部の現況等に関する講話をいただきます。時代の要請絡みで変革を迫られている教育学部、将来像の一端が伺えるものと期待しております。また、東北支部からは代表と数名の参加が見込まれます。懇親会は料理に定評のある「三国」、懐かしい仲間との交流を通して日常生活の活力アップを図り、併せて関東地区同窓会の更なる発展を誓い合いたいものです。万障お繰り合わせの上ご参集下さい。お待ちいたしております。

学的な交流を深めました。今後の予定では、「東北大学百一周年ホームカミングデー」が九月二十九日と三十日、川内南キャンパスと萩ホールを会場に開催されます。同窓生・在学生は勿論、一般市民も多数参加される魅力的な内容のイベントです。また、東北支部の総会・懇親会は十一月十日、教育学部棟で開催予定です。仙台は本場に近いです。皆様、懐かしく思い出の地仙台に是非足を運んでみてください。新たな出会いと発見に遭遇すること請け合いです。

◆第15回(創設30周年)東北大学教育学部関東地区同窓会総会・懇親会のご案内

平成元年7月に創設された関東地区同窓会は、今年で30周年を迎えました。つきましては、第15回(創設30周年)総会・懇親会を下記の通り開催いたします。懐かしい青春時代を共に「杜の都・仙台」で過ごされた同窓生の皆様が一堂に会し、旧交を温め交流の輪を拓ける絶好の機会です。数年前から皆様のご都合を考え、集まりやすい日曜日・昼開催に変更いたしました。ご多用のことは存じますが、一人でも多くの会員の方々のご出席いただきますようご案内申し上げます。

なお、出欠のご返事は、遅くとも10月15日(月)まで同封の葉書で事務局あてお寄せ下さい。

東北大学教育学部関東地区同窓会会長 星 永揚

記

●開催日 平成30年10月28日(日) 13時より

●会場 麗澤大学東京研究センター (詳細は2ページをご覧ください)



教育学部関東地区同窓会は、今年の七月で創設三十周年を迎えるとお聞きしております。この節目の年を迎えるにあたり、心よりお祝いを申し上げますとともに、教育学部・教育学研究科に対するこれまでのご支援に感謝申し上げます。

さて、今年は教育学研究科にとっても節目の年です。昨年の「きょうかん」でもご紹介しましたが、今年度より新組織がスタートしました。従来の講座を「教育学講座」「教育心理学講座」「教育情報アセスメント講座」の三講座にまとめなおし、これに「多文化教育論講座」「教育情報応用論講座」の二協力講座を加えた五講座体制としました。これに伴い、研究コースも再編し、「生涯教育学コース」「教育政策科学コース」「グローバル共生教育論コース」「教育情報アセスメントコース」「教育心理学コース」「臨床心理学コース」の六コース体制としました。

今回の組織再編の一つの目的は、現代の教育的課題に対応できる体制を整えることです。そのため、「教育情報学研究所」との組織統合を行い、近年発展が著しい教育情報分野を強化して、ICUの教育への応用などについて専門的に学べる「教育情報アセスメントコース」を設置しました。また、社会のグローバル化によって生じる教育的課題に対処するため、グローバル・ラーニングセンターといった学内組織の協力を得て、「グローバル共生教育論コース」を設置しました。一方、「臨床心理学コース」では日本初の心理学の国家資格である「公認心理師」取得が可能となるよう、学部も含めてカリキュラムの整備を進めました。さらに、従来の「教育ネットワークセンター」を改組して新設された「先端教育実践センター」では、様々な研究プロジェクトの企画や公募をすすめ、今日求められる教育研究を推進する拠点としての活動を始めています。

このように教育学研究科は、これまで以上に社会情勢や教育に対するニーズの変化に対応できる体制を整えつつあると考えています。一方、教育学の博士号を取得できる数少ない研究科の一つとして、本研究科の社会的使命の中核が研究者養成であることは、いささかも変わるものではありません。もちろん、時代の変化や要請に即応した形で研究教育を進めることと、教育学・教育心理学といった基盤となる学問分野の研究教育を地道に続けていくことの間には矛盾があるわけではありません。しかし、それらの方向性が常に一致するわけではないことに留意する必要があります。両者のバランスをとりながら、いかにして次世代を担う研究者を養成していくか。本研究科の今後の展開において、きわめて重要な課題になるであろうと考えています。

まずは新研究科のスタートを温かく見守っていただければ幸いです。これまで同様、東北大学教育学部・教育学研究科に対するご理解・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



卒業の昭和三十三年は大学の第五十期生に当たり、以後六十一年の人生を通過して昨年の創立百周年の節目でした。萩友会から依頼がありその年の周年幹事として秋のホームカミングデーの企画に協力を求められ教育学部同窓会の関東支部と仙台支部のご協力を得て微力ながら趣旨の一端を果たすことができました。遅まきながら改めて有難く御礼を申し上げます。光陰矢の如しと申しますが過ぎたる様々な時間の起伏が思い浮かびます。教育社会学専攻の一期生として片平丁に通う我が研究室には田辺教授、竹内教授、佐々木助

第15回(創設30周年)東北大学教育学部関東地区同窓会総会・懇親会

①日	時	平成30年10月28日(日)13時より(12時30分受付開始)～17時
②会	場	麗澤大学東京研究センター
③総	会	13時から
④講	演	13時30分 ★講師 工藤 与志文氏(東北大学教育学研究科 教育学研究科長・教育学部長) ★演題「教育学研究科の改組と大学をとりまく状況」
⑤懇	親	会 14時30分 「三国一」:(麗澤大学東京研究センター同ビル地下)
⑥会	費	5,000円(当日受付にてお支払いください)
⑦申	込	10月15日(月)までに、同封の返信用ハガキで出欠をお知らせください。
⑧問	合	せ 同窓会事務局 小林 昭文 TEL・FAX 042-325-2819

インフォメーション

☆講師：工藤 与志文氏のプロフィール
1962年10月2日、青森県青森市生まれ。1982年東北大学教育学部入学、1986年3月同大教育心理学科卒業。1986年4月同大大学院教育学研究科前期課程入学～1988年4月同後期課程入学～1990年9月同後期課程中退～10月東北大学教育学部助手。2001年4月札幌学院大学人文学部助教授～教授、2009年10月東北大学大学院教育学研究科准教授、2011年4月同大教育学研究科教授。2017年4月より東北大学大学院教育学研究科長・教育学部長に就任、現在に至る。専門は教育心理学、特に教授学習心理学。

☆会場：麗澤大学東京研究センター
麗澤大学東京研究センターは、新宿副都心の新宿アイランドタワー4階にあります。
所在地：東京都新宿区西新宿6-5-1 新宿アイランドタワー4階
電話：03-5323-6196
アクセス：JR新宿駅西口より徒歩8分。東京メトロ丸の内線西新宿駅下車すぐ上。
地図は麗澤大学のHP <http://www.reitaku-u.ac.jp/> 交通案内にあります。

教授、田原講師と江馬、藤木助手の陣容に、活気漲る大学院生の面々が和気藹藹研究室にあり、研究発表や合同調査の仕上げ等の会合は今も忘れ難い解放感のうちに師弟同格の談論の場となっていました。卒論指導の大学院勝又先輩には調査地点南朝集落の調査実践法を深夜までご指導頂いたり、片や小生のマスコミ志望の就職戦術に他日仙台市長となられた大学院藤井黎先輩の懇切なる作戦指導を得て在京民放基幹局応募の難関を突破するに道を開いて頂いたことなど感謝の念未だ尽きざるものを抱いています。そしてこうした殆どの方々はずでに鬼籍に身を置くところとなつてしまいました。

本年は関東地区同窓会発足三十年に当たる総会開催の年となり大いに祝福を申し上げます。図らずも小生が地区会長のご指名をお受けしたのは当時昵懇であつた元事務局長の河田喬夫氏と民放連専務理事在任酒井昭氏らの説得を頂いたことではありますが。河田氏とは東京に就職されて以来の長い交流であり、酒井氏は麴町の民放連事務局に転進されて以来民放連委員だった小生とは日常的に交流が多く、河田氏とは吉祥寺で、酒井氏とは四谷麴町界隈で楽しく酒席を共にした仲間でありました。そのお二人はすでに亡く、東京の夜は一段と寂しさの募る秋になりつつあります。

近年「きょうかん」では関東と仙台の支部交流が頻繁になり、その都度関係筋のご案内を頂いておりますが、佐々木徹郎先生や小林幸一郎先生ともお目にかかれる機会が与えられ嬉しく存じております。引き続きこうしたチャンスも設けて頂ければ幸いです。養護施設に藤木三千人先生をお見舞いする会も続いています。人間関係が希薄になる中で「きょうかん」の輪が様々な形態で拡大して行く事を祈つて止みません。



昨年四月仙台支部から東北支部への名称変更の会則が施行され新たな会の運営が始まり、四月で一年が経過しました。現状を報告し、あいさつに代えたいと思います。発足当初は新たな会員の開拓にあたり年度理事を中心に会員候補者の推薦をお願いし東北各県に在住の三十二名の同窓生にこれまでの経過を記した案内文を送付、昨年度末までに宮城・福島・山形・秋田各県から十二名の方々の承諾を頂きました。並行して昨年五月から事務局だよりを役員会の折に配布し経緯概要と更なる推薦を依頼してきました。関東地区の方々にも「きょうかん」でご存知の方の推薦をお願いしました。便りは、所々の都合で特別号を含め現在五号と少ない状況ですが今後

も続けていかねばと考えています。さて、予想はしていましたが東北支部は難しい船出となつています。旧支部時代からの課題の焦点化を図り一つ一つ潰しながら進めていけるよう、問題を洗い出し、課題を抽出、役員さんたちの意見を聞きながら改善できるものは速やかにしていく必要があります。問題点で大きいのは、例えば会費納入の問題です。二十九年度の納入率が50%弱と年々減少しています。一因に転居先不明者の増があります。会員名簿をチェックし、正確な会員数の把握が必要だろうと考えています。二つ目は会費の問題です。毎年度会費収入だけでは運営できない状況が続いています。収入に見合った運営が基本です。支出を吟味し切り詰めていく事としていますが、年千円の会費の値上げの声も出ています。その他に、会員の高齢化、若い会員不足、役員会の出席状況等々があります。その他課題として、学部同窓会との連携、総会の持ち方等



「青葉城大手門脇の隈櫓」

があり、考えると次々と出てきます。勿論役員の高齢化も切実で大きな課題です。今の状況を危機と捉え、変革の時として前進していきたいものだと考えております。人は人との出会によって変わるものだと思います。焦らず、くさらず、一歩一歩、人との出合、人との質の高い交わりの場を関東地区の方々のお知恵も借りながら作っていかねばと思っております。ものまねタレント・俳優の滝川広志(コロッケ)氏は「僕を支えてくれた母の生き方」と題して雑誌でお母さんの言葉を紹介しています。『あせるな、おこるな、いばるな、くさるな、まけるな』これを氏は「あおいくま」と覚え心の支えとしたそうです。私も見習わねばと改めて思っています。今後ともご支援よろしくお願いいたします。



去る7月22日(日)に東北大学一一周年校友会関東交流会が開催されました。猛暑にもかかわらず五百名の申し込みがあり、会場の収容人数の関係で途中受付をSTOPする盛況ぶり(実際の参加者は少し下回ったようですが、それでも過去最高を記録)。

懇親会も一二〇名を超える参加者で大盛況でした。教育学部卒業生の参加もこれまでにない十一名

のENTRYがあり、最年少では平成二十七年卒の方も二名おられました。来年は更に多くの教育学部出身者の参加者を期待します。来年は開催日を少し早めることも検討されるようです(猛暑を避けて六月下旬か七月上旬?)。会は、新しく第二十二代総長に就任された大野総長の大学現状報告に続き、東北大学校友会代表理事の原副学長から校友会の活動報告があり、続いて二つの講演がありました。

「AIはいつ言葉を理解するか?」と題する乾教授のお話しと続いて「和食は長寿命?」と題する都築准教授のご講演です。以下内容を要約ご紹介いたします(私見を交えて) 大野総長 「創造と変革を創造する大学」 「研究第一主義」の伝統、東大、京大に次ぐ国内三番目の帝国大学、「研究第一主義」を標榜する研究大学との紹介から始まり、「世界最高水準の知の創造と未来を拓く変革を先導し、世界三十傑の大学を目指す」と力強く方針を示されました。なお、世界の大学評価機関THEの評価では日本国内大学の順位は、京大、東大に次いで東北大は第三位となっているようです(二〇一八年版) 原校友会代表理事 「東北大学のネットワークを築く 校友会活動報告」

「研究第一主義」の伝統、東大、京大に次ぐ国内三番目の帝国大学、「研究第一主義」を標榜する研究大学との紹介から始まり、「世界最高水準の知の創造と未来を拓く変革を先導し、世界三十傑の大学を目指す」と力強く方針を示されました。なお、世界の大学評価機関THEの評価では日本国内大学の順位は、京大、東大に次いで東北大は第三位となっているようです(二〇一八年版) 原校友会代表理事 「東北大学のネットワークを築く 校友会活動報告」

萩友会は会員十五万人にもおよぶ同窓生に加え、在校生、現旧の教職員、そして在校生のご家族を含むメンバーで構成されている会であること。全学規模の萩友会活動とは別に学部など部局ごとの同窓会二十団体と地域や職場ごとの同窓会三十三団体が登録され活動しており同窓生の輪が広く浸透し結びついていると紹介されました。

乾情報科学研究科教授

「AIはいつか言葉を理解するか？」

人は言葉を使って意思を伝え、考えをまとめ、知識を記録する。ロボットの頭脳となるコンピュータ(人工知能)もいつか同じように言葉がつかえるようになるのでしょうか？

言葉の理解は人工知能研究の中でもっとも難しい課題の一つで、「言葉が分かる」までの道のりはまだ険しいそうです。

(以下は私見)

確かに、例えば津軽地方に伝わる民話を津軽の方が朗読し、コンピュータに翻訳させることはかなり先になることでしょうか、文章表現の明確なアングロサクソン系の言語は構文が明確でコンピュータが容易に理解でき、二十〜三十年前から実用化されてきました。

蒸気機関による動力化(第一次産業革命)、電気エネルギーによる大量生産(第二次産業革命)、コンピュータによる自動化(第三

次産業革命)、IOT活用による自律化(第四次産業革命)を支えるテクノロジの中心は高度なコンピュータ技術とAI、ビッグデータでこの分野の技術は幾何級数的に進展発展しているようです。特にAIは新しい産業を生み出すもので、この分野への投資で顕著なのは中国で日本の投資額の数十倍と言われています。またこの分野の研究論文数では中国が世界NO1(日本は九位で小国シンガポール以下)。日本の将来が案じられます。

都築農学研究科准教授

「和食は長寿食!」

日本人の平均寿命は伸び続け、世界有数の長寿国となった。日本人は寿命が長いだけでなく、自立して生活できる期間を示す健康寿命も長いことで知られている。日本人の健康寿命が長い理由は、欧米人と異なる特徴的な食生活に起因すると考えられており、日本人の食事「和食」は多様な食材を使用し、健康維持に有効な成分を数多く含んでいることが要因。しかし、現在の日本食は欧米の影響を受け「食の欧米化」が進行し、生活習慣病の罹患率も増加している。ではどの時代の日本食が健康維持に有益かを評価検討した結果、一九七五年頃の日本食が最も健康

有益性が高いことが明らかになったとの事。

しかし、昨今専業主婦として家

事に専念出来る家庭は当時に比べ減少しており、また国籍不明の食が巷に氾濫しており、元経団連会長の土光氏の好んだ(めざし、納豆、発酵食etc)等は日常の食卓にはあまり見かけられなくなっ

たと思われる。多彩な食が氾濫していることに加え、生活・労働環境が大きく変わり、一九七五年頃の家庭的和食が日常の食卓に戻ることは期待できない気がする(私見)。

同窓生の声

「人生一〇〇年時代」を迎えて

杉浦 洋一 (教育社会 63年卒)

先日TVで「終末難民：長寿はたして尊いのか？」をテーマに取りあげられていました。60歳(または65歳)以降の現役引退後の第二の人生をどう過ごしたらいいのだろうか？街に出てみるに外国人旅行者に澁刺とした高齢者の散策姿が目につきます。

我々が現役時、先輩方から「定年後はバラ色の人生」、「晴耕雨読の生活」とかよく聞かれました。自分が後期高齢者となり、はたして先輩方からの「明るい老後生活」が実感できているだろうか。

老齢年金のみでの「優雅な老後」をエンジョイ出来るのだろうか。先日のTVでも大半はギリギリの年金生活者の実態を放映していました。「人生一〇〇年時代」を豪

語するにはあまりにも実感のない現状と思います。

また、同TVの調査では就労希望の高齢者は60〜75歳で33%、76歳以上で32%、合計65%の高齢者が働きたいと思っていると事です。「人生一〇〇年時代」をスローガンに掲げるなら、これら高齢者の就労希望を解消することが「終末難民」の解消になるのではないのでしょうか。

「思考の根源」

菅田 美紀子 (教育心理 67年卒)

毎朝植物に水をやる。いつも根元を観察する。植物の全体の姿からは見えないのに、間違いなくその花の形・色、大きさに生長する生命の神秘さに心が魅かれる。

小・中学時代は多分わかたつてもりていたが、質問ができなかった。高校時代は、理科部や天文部で実験実証に夢中になり、得た物も多かった。大学では、人間の心を学問の対象にすることに衝撃を受けた。実験さえあった。心理学

それも教育心理学。4年間だけでは入口を覗いたようなものだった。卒論は「5歳児就学は可能か？」あの夏、幼稚園や保育所で実験や、世界の教育制度や教育の在り方を学んだ。恩師宮川先生の声が、今でも耳に響く。

実生活では、子どもの発想に新鮮な驚きを感じ続けた。テキストにあった「ストーブの赤い火が僕

を怒っている」などといった例は枚挙に暇がない。新しい色鉛筆セットを小学入学祝いに奮発して上の子に買い与えたとき、いきなり12色を半分折っていた。親は怒った。しかしずっと後であれば妹のために半分にしたのだとわわかり、忸怩たる思いをしたものだ。子どもは自分を子どもだとは思っていないのだ。

だから、高校教師として現場にいる時は青年期の心に謙虚に向き合いたいと思った。彼らの根元に水を与えるにはどんな工夫ができるのか。英語の授業やホームルーム活動、部活動、進路相談、生活指導等多様な場面で日々夢中だった。適切な表現ではないが少なくとも学問の根幹を通じて得たことに拠点を置きたかった。大学病院の講義室で受けた精神医学の授業は「ヒト」を知るうえで最も参考になった。

今まで学んできたことすべてが私の今を創り上げて来たのは間違いのない事実だ。現状に抗い、自分なりの教育機関を作りたいとか、準備不足で教壇に立つな、とか学生時代の情熱を引きずる時もあるが、今は花を添えるように国際交流への目を開き、外国語の習得に明け暮れる日々である。

「母からの宿題」

横館 厚太 (学校教育 67年卒)

奥津城に風やさしかれ紫木蓮

七年前亡くなった母の遺品整理をしていた兄から連絡があった。「和歌、俳句がまた出てきた。読めない字があるから頼む。」と私は困る。大学で書道の単位は取ったが自信がない。しかし兄の要請は断れない。亡くなった直後は母愛用の「日記俳句」をまとめて冊子にはした。何しろ七人の孫それぞれ成長に合わせて作った膨大な数の和歌・俳句だった。

かたことの子と語り居て春の宵昭和四十九年四月孫〇子と遊ぶ短冊の字は殆どが崩し字、変体仮名、草書。読み解くには古文書の知識も必要だ。昨年は葛飾区の古文書講座を受講、「延享三年村指出シ明細帳」などという文書の解説に難儀した。但しそれでも母の歌や句の完全読解には及ばない。今年になって今度は北区の講座を受講、「近世古文書解説辞典」を傍らに猛勉強だ。変体仮名一覧表を片手に母の短冊とにらめっこが始まった。これはこう読む……。

いがある。

今、本棚の資料参考書は次の通り。くずし字解説辞典・実用変体がな・江戸のくずし字いろは入門・変体仮名の手引き・著名人色紙集

おふくろ様、ゆつくり見守ってください。宿題・「和歌俳句集」必ず完成させます。母の思いに応えます。

戦いの最中に生まれし

吾が子なれば

行く世々豊かにありてしものを行く世々豊かにありてしもの

母は生誕百年・その年を迎えた。

【雑感】

阿部 孝

(教育行政 69年卒)

仕事に区切りが見えかけた頃、町会にご縁を得ました。双葉マークをつけスタートして数年、定年を迎えて地域に入学した人、この地で生まれ育った事業者、未だ現役の勤め人、主婦など様々な経歴の人たちとともに。そして中には体に不自由さを持ちながら、また家族の介護を続けながらの人も共通しているのは、誰もが地域に愛情を持っていることです。

一般的にボランティア活動が、しっかりした事務組織によって支えられることは困難です。わが町も活動マニュアルもいまひとつ。会員の入退会、町会費の徴収、行政機関からくる各種委員の推薦、

会議・研修会の案内、イベントへの参加要請など、活動を進める前に対応しなければならぬことが山積です。

こうしてみますと、町会の活動は大変そうにみえますが、存外楽しいものです。あちこち頭をぶつけることで地域の姿や会員の顔が見えてくること、またこれまで全く異なる世界に生きてきた人々が集い、飲み・食い・語ることなど、新鮮このうえありません。

さて地域における課題には様々なものがありますが、町会のテーマの主たるものは生活課題です。かつて町会といえは運動会・文化祭・夏祭りなどが行事の主役でしたが、今日では安心・安全な地域を目指しての空き地・空家対策、防犯パトロール、防災訓練(避難訓練)、高齢者世帯の支援活動、徘徊模範訓練などの新たな事業が加わりました。

ただ困っていることがひとつあります。町会はいま、人手不足なのです。公民館に向くと、趣味や習い事の活動紹介やイベント案内が所狭しにあり、誰もが好きなことに取り組んでいる証左で、喜ばしい限りです。ところが地域のため、他人のためという組織に人は集まりません。活動に魅力がないという視点を越えた所に課題があるようにおもいます。日本にお金じゃブジャブあったころ、政治家の人気取りもあっ

てか、福祉政策も教育施策も個人にお金を配って幸せに近づこうとしました。財政が逼迫した今になって地域で支えあつてという話になっていきます。開放された欲を抑えて、皆で助け合う世界を造るには時間がかかりますよ。よき人々との出会いを楽しみに今日を歩むことにします。

【片平校舎教育行政合研の思い出】

銭谷 眞美 (教育行政 73年卒)

私が入学した昭和四十四年は、東大安田講堂事件があつた年であり、物騒な時代であつた。東北大学でも、入学式は粉砕され、六月には川内校舎の教養部はストに突入し、以来断続的なスト状態となり、機動隊の導入や学部進学試験ポイント運動なども行われた。したがって、教養部時代の思い出は、学業生活よりも、専ら入部した詩吟部や南光台支倉荘での友人たちとの自堕落で無軌道な交友の日々ということになる。

学部進学者が半数以下という片平校舎での学部生活は、小人数ということもあり、同期の皆さんや先生方との濃密な人間関係の下で、大学へ通うのが楽しい日々となつた。

同研究室「通称「合研」と呼ばれる部屋があり、そこには、對馬達雄先生、神山栄治先生、佐藤全先生、若井弥一先生をはじめ助手の先生方や大学院生の方々が常時詰めておられた。私たち学部生も大学に行ったらまず合研に顔を出すのが通例だった。研究や進路の相談など合研の先生方は年が近いだけに私たちにとっては大きな頼もしい存在であつた。

合研では、教授の先生方も参加して年に一度一泊二日の研修旅行も行われた。三年生時が当時乳児死亡率ゼロなど保健の村として知られた岩手県沢内村であつた。四年生時が青森県むつ市の恐山だつた。実践を大切にする合研の学風に沿った巡検ではあつたが、私には寺山修司の映画「田園に死す」そのままのおどろおどろしい恐山の霊湯温泉で合研の皆さんと語り合った夜は忘れ難いものとなつている。

先日上京した同期の石垣仁一君と楽しい夜をすごした際、合研の旅行は私たちの修学旅行だったと話しに花が咲いたので、記してみました。次次である。

【教員養成の現場から】

細沢 富夫 (心身障害 79年卒)

この三月、埼玉大学教育学部長を退任した。この四年間は中期目標・中期計画の策定とその自己点検・評価に追われていたように思

う。法人化された国立大学は、自
律的に運営していくことを基本に
しつつも、社会の変化に対して大
学がどんな役割を果たしていくの
かが、問われるようになってきた。

「法人化」とは、要するにビジネ
スマデルに準拠して大学を造り替
えることのような。文科省に承認
された中期目標・計画にもとづい
て運営し、毎年度ごとに自己点検・
評価し、定期的に認証・評価を受
ける。この認証・評価は国立大学
の基盤経費である運営費交付金に
反映される。したがって改革、改
善の取組なしに大学は生き残れな
い仕組みになった。生き残る価値
のある大学だけが生き残る。つぶ
れても自己責任となる。こうした
P D C A サイクルによって、現在
全ての国立大学は改革の加速と機
能強化が求められている。

国立の教員養成学部・大学の改
革の方向性は、量的縮小、「新課程」
(教員養成を目的としない課程)
の廃止、小学校教員養成課程への
重点化、教職大学院の拡充、修士
課程の教職大学院への段階的移行
である。数年後には急激な少子化
に伴う教員採用減が予測されてお
り、教員採用率が低迷する国立の
教員養成学部・大学の量的縮小は、
やむを得ない面もある。

ただ法人化が大学運営を自由に
すると言われていたが、実態は
まったく逆である。時の政権に
よって目標そのものが管理され、

その成果に応じて予算が査定され
ていく。毎年運営交付金が削減さ
れており、今後も継続される。ほ
とんどの大学では、定年退職した
教員の後任補充を一年〜三年凍結
している。

教員の後任補充の凍結とは、若
手研究者のポスト削減ということ
だから、今後の日本では若手が安
定した職について活躍できる場が
ほとんど失われていくということ
である。こういう流れで日本の高
等教育改革が進むとしたら、日本
の教育研究力は壊滅的な状況にな
ることだろう。

「自閉社会のアンチテーゼ」
野村 正宣 (教育心理 89年卒)

中高生の学校教育現場にいる者
として朝から眠そうにしている姿
を見るにつけ、これでよいのだろ
うかと自問しています。夜遅くま
でスマホやタブレットから離れら
れず睡眠不足のまま登校する生徒
が少なくないようです。東北大学
川島隆太教授の『スマホが学力を
破壊する』(集英社新書)や久里
浜医療センター院長樋口進氏の

『スマホゲーム依存症』(内外出版
社)を読むと、心の成長の蝕まれ
方は尋常でないことを知らされま
す。アルコール依存症やギャンブル
依存症は以前からあったもので
すが、「スマホ依存症」はもつと
身近にあり誰でも陥る危険性があ
る点で特に青少年にとっては切実

な問題です。便利で万能性を備え
たものであるだけに、低年齢層に
は規範や倫理意識の未成熟なうち
に所持することになり様々な人間
関係上の問題を生じさせています。
そもそも大人たちも平気で歩きス
マホをする者ばかりなのは嘆かわ
しい限りです。私は歩きスマホは
絶対してません。なぜなら、まっ
すぐ歩かないで迷惑かけて自分の
世界にだけ入って平気であるあの
人たちの同類になりたくないから
です。この自閉的社会状況をどう
打開していけばよいのでしょうか。

私の勤める学校ではキャンパス教
育に伝統があり、校外施設の野尻
キャンパスサイトで毎夏教育キャン
プが行われ、今でも生徒たちに入
気です。電子機器によるコミュニ
ケーション手段から離れ、その場
で出会った初めての仲間たちと共
働して数日間自然の中で過ごしま
す。全てにおいてダイレクトな
キャンパス生活の中から、本来の人
間性の回復にも気づかされる貴重
な機会です。朝、鳥の囀りを聞いて
目覚め、日が高く昇ったところで
水上プログラムを楽しみ、お腹
がすいて食べ、仲間と共に歌い合
い、笑い合い、満天の星に興じつ
つ眠くなって眠る。こうしたシン
プルでダイレクトな生活こそ必要
になってくるように感じています。

そこでは他者に対して開いていく
こと、共働していくことが求めら
れます。自閉社会のアンチテーゼ

「教育学の可能性」
西山 拓 (教育哲学 96年卒)

教養部の最終学生でした。当時
は国立大学改革の渦中で、従来の
学問を情報学や政策科学などに読
み替えるような流れがありました。
教育哲学も人間形成論への再編が
検討されており、経済学部でも社
会思想史の講座が閉じたこと記憶し
ています。

私も直接教わった沼田裕之先生
は、九六年の論稿「総合大学にお
ける教育学部の理念」の中で、教
育学部は総合的全体について専門
的な研究をするという一見矛盾し
た研究を行うよう要請されている
と書いています。そもそも教育学
は人文・社会・自然のすべての分
野からの参入が可能で、教育学部
は文系の学部の一つに収まらない
のではないかと思つたものでした。

学部卒業後、模索の期間があり、
大正大学と早稲田大学の大学院で
比較文化論や日本思想などを学び
ました。これといった職に就ける
わけでもないところ、縁あって川
崎市の外郭団体である生涯学習機
関の嘱託職に就き、「かわさき市
民アカデミー」という市民大学の
運営に係るようになりました。行
財政改革の流れで市民大学がNP
Oとして再出発するとそちらに再
就職し、現在に至っています。
並行して、二〇一四年から川崎

市社会教育委員をつとめています。
図書館や市民館等の社会教育施設
への指定管理者制度導入の是非や、
川崎が抱えるヘイトスピーチ・多
文化共生の課題などに社会教育の
立場から取り組んできました。

学部卒業後教育学を離れたつも
りが、社会教育・生涯学習の世界
に漬かることになりました。仙台
での専攻は社会教育ではなかった
けれど、教育学のもつ雑学性・包
容力を感じつつ、そして、教育に
関する哲学的探求はすべての基だ
よと教えてくださった教育哲学・
教育史専攻の先生方の言葉を思い
出しながら日々を過ごしております。

トピックニュース
「苗床会のこと」
菊合 邦雄 (教育社会 60年卒)

「週三回東北大学合唱団で活動。
他にブルー、ウォーキング」
「晴古(ルフ) 雨暮」
「毎日一万歩目標の徘徊老人、週
一回は映画館へ足を運ぶ」
「団地のシニア社会学級に参加、
町内の一人暮らしの仲間づくり、
町内のお年寄りが気楽に集まるカ
フェの活性化に努力中」
「夏は蓼科で農家から休耕地を借
りて畠仕事、冬は実家の藤沢で相
模湾で魚釣り」

これは今年の6月、教育社会学
科卒業生の同好会「苗床」の飲み
会に出席した一部の人の近況であ

きょうかん 第14期 (平成28年11月~平成30年10月) 維持会費協力のみなさま

納入ありがとうございます。(168名、敬称略、専攻別・卒業年度順)

- | | | | |
|--|--|--|--|
| <p>【教育哲学 13名】
若林 滋 木村裕也
笹川智恵子 古橋康子
鈴木重男 伊藤忠篤
木村俊二 戸張嘉勝
小林昭文 福原 武
伊藤久徳 西山 拓
水越丈晴</p> | <p>【教育社会 46名】
小林幸一郎 家根敏明
大寄 晋 野原忠博
長谷川嵩 菊谷邦雄
石塚米子 堀籠英夫
吾田壹明 杉浦洋一
西村孝雄 浅野 勉
佐藤門哉 鈴木俊之
中林勝男 岩間 剛
星 永揚 佐久間孝正
塩入 肇 千條 武
巽駒太郎 小玉幸彦
菅野 正 野島節子
山口久子 北館博人
市塚 守 佐々木昭美
佐々木博 津吹 茂
今野俊治 石川悦三郎
文屋弘之 菅野 清
井腰伯子 上羅 廣
岩田 真 小泉信三
佐々木浩 近藤一康
田崎正紀 飯野健児
高島 晃 歌代真人
大野正利 鈴木英一</p> | <p>【教育心理 25名】
秋田義明 佐倉三雄
斉藤哲至 新井雄啓
佐藤 全 稲葉雅彦
高橋靖直 望月 久
小林順子 青木 進
阿部 孝 熊谷 晃
阪内宏一 羽尾和夫
田中博康 苜澤 薫
福田昭夫 鈴木健一
銭谷眞美 廣池幹堂
岩根夫左子 大桃敏行
浅野良一 高木安幸
香澤 巨 猪瀬幸夫
高橋寛人 原 祥子
小澤恵子 森 賢一
寺内 誠 中島洋明
橋本有子 田中愛智朗
仲田耕太郎 片桐みゆき
長沼真吾 小川慎介</p> | <p>【心身障害 12名】
秋田義明 佐倉三雄
新井雄啓
稲葉雅彦
望月 久
青木 進
熊谷 晃
羽尾和夫
苜澤 薫
鈴木健一
廣池幹堂
大桃敏行
高木安幸
猪瀬幸夫
原 祥子
森 賢一
中島洋明
田中愛智朗
片桐みゆき
小川慎介</p> |
|--|--|--|--|

※「きょうかん」
会員の拡大にご協力を！
お知り合いに未加入の同窓生がいたら、ぜひ、「きょうかん」へのご加入をお勧めください。お声掛けをお願いいたします。

- 郷家和子 員見芳房
落合俊郎 鷲尾純一
山森伸子 細淵富夫
北島善夫 小林 巖
及川 元 安田養次郎
篠 博久 梶原 葉
菊地 明 渡辺健郎
高橋渥子 猪又和子
田中重富 大原亮子
川野恵子 高橋睦人
戸塚 薫 永井勝利
金野久子 渡辺成男
後藤 光 渡辺登美子
沢登袈裟平 落合英彦
山崎保雄 横館厚太
石森ミネ子 富永和彦
細谷靖男 吉成 明
鬼 宗久 星 重昭
以上合計168名
(平成30年8月31日現在)

編集後記

▼東京は六月下旬に早くも梅雨明け。七月上旬猛暑の日、出かける道の真ん中を羽化前の小さな蝉。近くのケヤキの幹に止まらせる。帰り道、蝉は羽化せず幹に止まっただま。死んでいるようだ。余計なことをしてしまったか。妻に顛末を話した。二日後の晩、ベランダの網戸で「ジー」とも「ギー」ともつかぬ一本調子の途切れぬ音が十分ほど続いた。あの小さな蝉が、抜け殻も何もなかった。助けた蟬がお礼に来てくれた。妻も同じことを考えていた。科学的には説明がつかないが、因果を確信できそうな体験をすることがある。

人間社会が大きく進歩を遂げている中で、忘れてしまったり、しまい込んでしまった人間の能力や特性に思いをはせてみる▼本部同窓会事務局の神谷先生から、本部宛メールのうち関東地区同窓会関連のものを転送するようにしたいとのご提案。その後早速入会手続きの問い合わせ。このような連携事業は、本同窓会の活性化にも寄与するものとの思い新たに▼早いもので、事務局の担当となつて五年。星会長はじめベテランの諸先輩のご指導の下でどうにかこうにかお手伝いを終了。学士会館地下の東北大学東京連絡事務所での仕事は懐かしい思い出。多くの若手会員の加入と会えますますの発展祈ります。有難うございました。

(小林昭文 教育哲学76年卒)

第15期(平成30年11月~平成32年10月) 維持会費納入のお願い

東北大学教育学部関東地区同窓会は、平成元年7月に創設され今年で30周年を迎えました。この間、会員の皆様のご協力ご支援に支えられ着実に歩を進めることが出来ました。心から感謝申し上げます。11月からは第15期に入りますが、更なる発展を期し役員一同決意を新たにしております。同窓会活動は、会員の皆様からご協力いただきありがとうございます。維持会費(2年間で3,000円)により支えられています。第15期もご協力いただきますよう、よろしくお申し込み申し上げます。

つきましては、同封いたしました「郵便振込票」で平成30年12月末までに、維持会費を納入いただきたくお申し込み申し上げます。

東北大学教育学部関東地区同窓会
会長 星 永揚
事務局 小林 昭文

●連絡先
TEL・FAX 042-325-2819
メール zelkoba304aki@kyf.biglobe.ne.jp